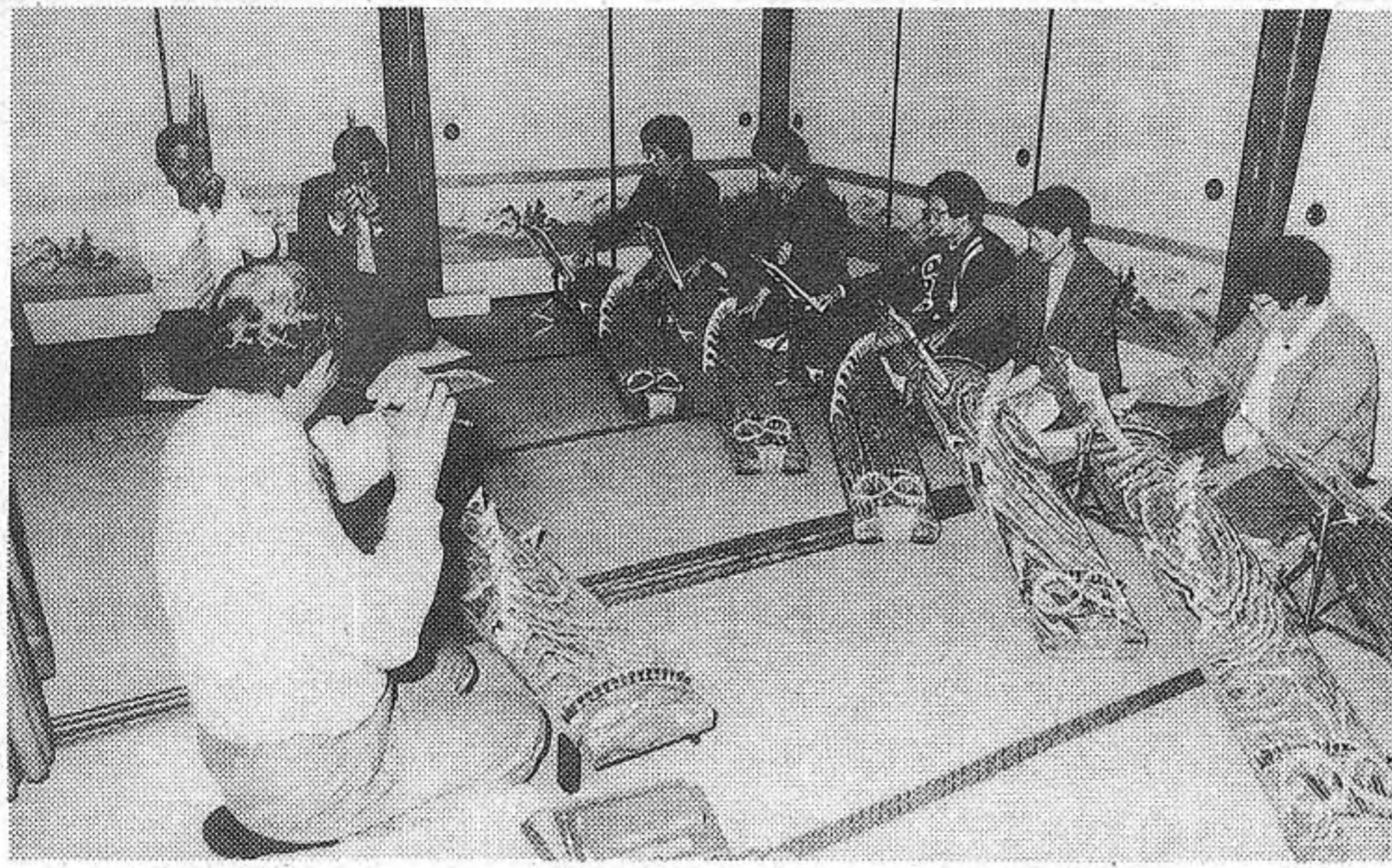


ふるさとと探訪



[5]



小野楽長(手前左)から箏と笙の指導を受ける参加者たち=10月30日、味方町で

日本の伝統的な弦楽器の「こと」は、「琴」とも「箏」とも書く。明治の初めに岡山で生まれた吉備楽では、後者の方を使う。その吉備楽の本格的な講習会が先月末の二日間、味方町の黒住教綾部教会所で初め

吉備楽

岸本芳秀が雅楽を基に大成

綾部では黒住教信者ら守り継ぐ

て開かれた。十三弦の箏を主体にして三管(笙、横笛)と二鼓(太鼓、鉦鼓)で演奏される吉備楽は、備前岡山藩主の池田家が重宝していた雅楽を土台として、同藩の岸

本芳秀が吉備地方独特の曲節を加味して大成させた。同じ岡山が発祥の地の黒住教は祭典の時に使う祭典楽や余興楽、家庭楽として吉備楽を採用している。岡山に本部がある金光教も余興楽として使っている。鳥取の黒住教教会所に生まれた新宮さんは、幼い時から吉備楽に接してきた。昭和十三年に綾部に移り、二十八年ごろからは箏を弾くようになった。特に指導者はなく、譜面を頼りに集

し、近くに住む新宮美恵子さん(69)によると、昭和十年ごろまではさかのぼれるという。披露されるぐらいで、余り知られることなくひっそりと守り継いでいる。それでも「音に気品があり、祭典に合わせて演奏する時は荘厳な気持ちになる」と吉備楽に魅せられた新宮さんは、岡山に通うなどして熱心に学んでおり、今回の小野楽長の来綾を實現させた。指導した小野楽長は、新宮さんたちの演奏を聴いて「安心しました」とほめた。黒住教の教会所の中でも、吉備楽の講習会を開いている所は珍しい。府内と福井県小浜地方を合わせた第十一区の中では綾部を含め二教会所だけという。これまで教会所内の行事だけで披露されてきた吉備楽だが、新宮さんたちは福祉施設での慰問活動などで発表しようかとも考えている。(片山)